

ソローの文学と東洋思想

川 津 孝 四

ソローの作品は米文学で、もう古典の一つになっている。ソローの著書には *Walden* の他には *A Week on the Concord and Merrimac Rivers*, *Cape Cod*, *The Maine Woods* とか *Excursions* 等があり、11 冊本の全集もあれば 20 冊本のものもある。彼は *Journal* と云う日記の形のを 30 冊も書いた。*Walden* にしても *A Week* にしてもその *Journal* からのものを材料にして書いている。

ソローは 1817 年 7 月 12 日 Massachusetts 州 Concord に鉛筆製造人の子として生まれ、あまり裕福でなくて子供時代から働きつけていたが、教育は大切に考えて、遂に Harvard 大学を卒業している。ソローが 1845 年に Concord の Walden Pond という小さな湖のほとり、人里から一哩離れた森の中に自分で造った小屋の中で唯一人二年と二ヶ月の間住んでいた事は非常に有名な話である。その本の *Walden* という名前はその湖の名からつけたものである。

ここでの生活は極めて simple なもので食物は主として自分で耕作したもの、必要物も最少限度にとどめ、一年僅か 8 弗位で生活し、肉も食わず、結婚もせず、読書執筆の外は大自然と共に過した。しかし彼は方丈記の作者の様に世の無情を感じてとかいうのではなく、生活の余計なるさいことを去って、自ら生活を再吟味しようとしたのであった。しかしソローは小舎で唯一人生活するのを理想とした訳ではなく、再び小舎から自分の家へ、また社会へと帰っている。

ソローから見ると店頭や事務所で孜々として働いている世人は恰も印度の婆羅門教徒が難行苦行をしている様に見えた。しかもそれは A fool's

life 「愚人の生活」で世人の大部分は誤解の下に労働している。無智と誤解のために生活上の人為的な心配や要らぬ粗雑な労働をなす事が多いので、生活の秀美な果実を摘む事が出来ないといっている。それではどうすべきか。彼は我々の生活の煩勞と心配の内最も大きいものは何であるかと考え、第一の The necessities of life (生活の必要物)として、食物、宿舎、衣服、及び燃料をあげ、第二の必需品として少しばかりの道具(ナイフ、斧、犁など)なお好学者にはランプ、文房具、幾冊かの本をあげている。この様に極く切りつめた必需品のみで生活しようとしたが、それは何も儉約とかいう意味ではなく、それによって、出来るだけ多くの自己完成に要する余暇を得て生活の fine fruits を結ぼうとした。こう考えたばかりでなく、東洋の古の哲人聖者の様に進んでこれを実行した。

Walden の池畔に赴いたのはそのためであった。外的な煩雑な災を去って自由な天地に聖者の様な真摯な態度で自己完成に務め、その理想とする覚醒の生活、冥想と無為の生活をし、靈能の導く所に従って生活した。

ソローはこのように simple life によって、外的な束縛から己れを解放し、己れが内心の声によって思想し、これを実行し、なお大自然に接して、その感化をうけ、また東西の古典聖典から多くの暗示と刺戟をうけて、自己完成につとめた。ソローはギリシヤ古典によく親しんだが、殊に東洋の古典聖典を愛読してその影響を少なからずうけた。

彼は色々な草木のことや色々な生物のことについてもよく知っていたし、Walden 湖の魚も彼にはなれていたし、鳥も彼に親しんだようである。肉食を忌み殆んど菜食をやり、酒も飲まず、煙草もすわず、肉慾の節制ということに非常に注意して、節制は我々を元氣付け、精神を鼓舞する。貞潔は人間の花である。天才といい勇壯といい、聖徳というのも全てこの花に生ずる果実であるといっている。

彼は普通肉食はやらなかったけれど、一度山兎を食べた事もあった。彼

は吠陀經(古代印度アーリア民族の頌歌集)にあるように「遍在する最高の実在を真に信ずる者はあらゆるものを食って可なり。」ということも知っていたようである。

彼にあってはいわゆる肉慾だけでなく、食うことも飲むことも肉体的に眠むることも、つまりは皆肉慾である。もし貞潔たらんとすれば、これらの摂制を守るべきだ。懶惰は無智と肉慾のもとだ。努力によって叡智と純潔を得なければならぬと、そして、『全ての人は自分の崇拜する神のために、我自体という殿堂を自分独特の様式で造る建築家であり、彫刻家である。しかもその材料は我々自身の血であり、肉であり、骨である。如何なる高潔も皆直ちにその容貌を醇化し始め、如何なる野卑もしくは肉慾もこれを野獣化し始める。』と彼は人間の靈智を羅針盤として行なった。

前述のようにソローは禁慾的で隱者のような生活をしたけれど、それは宗教的な悔悟から罪を購うためとか、来世を恐れてとかいうためではなかった。

彼が生活の luxuries を棄てたのはそんなものがなければ、一層健全幸福であると思ったからで、彼の simple life は抑制にあるのではなく、生存の眞の快樂をうるにある。厭世的でなく、楽天的である。外的ではなく、内的で、この simple life に依って自由と余暇を得て、己が生活を平穩で擾されない心持で愛しようとした。

彼は正に東洋人の冥想といい、無為という語の眞の意味を知っていた。彼は business というものを嫌い、leisure (余暇) を愛した。しかしそれは idleness などというものではなかった。

彼位時の価値を言葉と行為に現わした人は少ない。必要な仕事を排斥したのではない。そんな余暇は賤しく不適當な余暇である。彼のはこんなものではなかった。

また、彼には何処か老子の思想にも似た処があって、一種の無政府主義

的などところがあるが、これは無茶な無政府論とは全く異なり、各々の人間が目覚めて自己を完成した後にこそ得られる理想の世界なのである。彼は良心を以って国家に奉仕する。真正の人であったので、時には必然的に国家に反抗せざるを得なかった。政府の暴虚無能に堪忍出来ぬ時その従順を拒絶して、反抗する権利のあることを認め、或時は教会税の支払を拒絶したり、人頭税の支払を拒否して、そのために一晚牢獄に投ぜられた。その時 Emerson が心配して会いに行くと、「何故貴方はここに這入らないのですか。」といったことは有名な話である。

印度のあの有名なマハトマ・ガンディーはその Satyagraha の信念から印度民族の解放のために戦ったが、南阿に滞在中 1907 年ソローの論文 *Civil Disobedience* (市民の反抗) をよんで靈感をうけ、強い示唆を与えられたことを Henry Salt へ手紙で書き送ったのでよく世間に知られているが、古い東洋特に印度の思想の影響を受けたソローがその死後に新しい印度の聖哲——といっても兇刃に倒れて今は既に世にいない——が、その聖哲にかく強い感化影響を与えたことは奇しき因果といわねばならない。

ソローは自然に親しんで普通凡人の到底了解出来ない 靈的境地に達し、孤独も孤独にあらず幸福にひたった彼はついに自然そのものの中に融合するのを感じた。

‘This is a delicious evening, when the whole body is one sense, and imbibes delight through every pore. I go and come with a strange liberty in Nature, a part of herself.’ (Walden, Solitude)

「今宵は心地よい宵である。我が全身は一つの感じであって、法悦をあらゆる毛孔から吸収する。我は、自然の一部、神通自在に大自然の中を往来する。」こうした Mystic な文句に始まる Solitude の章は自然に対する彼の思想と感情を最もよく表現している。この文句はつまり自然との交りに於けるエクスタシーを表わしたものである。彼と自然とは差別を撤し

て「物心一如」の境地に達したものである。釈迦が王城を後にして森に入り、自我を拡張して宇宙の実相にふれ、真如の世界に達したように、彼もまた、といってもお釈迦様とソローではとても太刀打にならないが、心眼を自我に注ぎその自我を拡張することによって広袤の靈感即ち物心一如の境に達したのである。

この広袤の靈感、物心一如の境——即 Expansion の理想的な状態は、東洋思想の最大の特色である人と大自然との調和、梵（ブラーマ）と我（アートマン）との一如の思想と同じものであって、ソローは明らかに東洋思想の影響を極めて深くうけている。

彼は自分を大自然の中に拡張し、そこにみなぎる霊と融合し、大生命を直覚したのである。

こうなると大地は「地質学者や考古学者が研究する死せる歴史の断片でなくて生きた大地である。その偉大な中心の生命に比すれば、凡ての動植物の生命は寄生的なものに過ぎない。」「我等の直ぐ傍には最も偉大な法則が行なわれている、天と地の精微なる力の及ぶ所のなんと洪淵なことであろう。」「この力は万物の本体と一如なるためこれを離し得ない。この力故に人間は心を清浄にし、神聖にして、身に祭の衣服を纏い、供物を捧げる。世界は神秘的な霊の大洋である。その力は我々の周囲をとりまいている。」といいこの穏かで楽天的な自然崇拜は彼の大胆な pantheism（凡神論）の精神となっている。

ソローの思想は彼自身によることももちろんであるが、ドイツの romanticists とも関係があり、エマーソンの思想の影響もある。が東洋の思想から大きい影響をうけていることは多くの例証をあげて説明し得る。

しかもドイツの romanticism もエマーソンも各々東洋思想の影響があるので、ソローは自ら直接東洋の古典聖典・翻訳されたものを通してではあるが、色々と読んで深い影響をうけると共にドイツのローマンチズム

やエマーソンの流れを通して東洋の影響が入っているのである。

エマーソンやソローの流派の思想を Transcendentalism (超越主義) といい、エマーソンは非常に深い思想家として有名であるが、ソローは思想家であるばかりでなく実行家であったという点で有名である。

ソローは直接ペルシヤ語やサンスクリットや支那語で東洋の古典聖典をよんだのではなくラテン語やフランス語を通して、また英訳されたものを通してであったが東洋の古典聖典に親しんだ。

ソローが 1849 年に出版した *A Week on the Concord and Merrimac Rivers* は 1839 年 8 月 31 日(土)から一週間程、兄弟の John と二人でボートで Concord 河と Merrimac 河を旅行したときのことを記録したものであるが、これは Walden に滞在中最初の記述に筆を加えたもので、その内には東洋文学にふれた処もある。「光は東方より —— は今も学者の Motto としてよいであろう。」といい、支那、印度、波斯、ヘブライ等の神聖文書を人類の聖典としてまとめて印刷することは現世紀の誇とするにたる仕事だ。」といている。ソローは Sadi の Gulistan やマヌの法典や Bhagvat-Geeta や論語孟子からも引用しているが唯引用しているだけでなくこれ等の東洋の聖典からうけた inspiration は彼の思想文学に溶け込んで不思議に光っている。

Walden はソローの著書中でも最も有名なものであるが、これにも既に色々申したように東洋の聖典や思想と極めて関連する所深く、波羅門や Sheik Sadi や Sanskrit や吠陀經典や “The Vishnu Purana” (これは印度の古い史話) や “the Bhagvat Geeta” (印度の古い叙事詩) や “Brahma and Vishnu and Indra” (Brahma は創造を司り、Vishnu は保存を司る神で、これは破壊を司る Siva と共に波羅門の最高の三体神であり、Indra (因陀羅) は第二位の神々の内の一つで地の雷鳴と電光の神で、又戦の神であり、仏教の中では帝釈天) こうした古ペルシヤ古印度の

ものに到る所で言及しているばかりでなく Economy の章では孟子や論語を引用しているし、あのガンヂスの神聖な水にも比すべき Walden Pond で浴みしたが、それは宗教的な仕事であったし、自分のした最良のものの一つであったと、あの殷の湯王の沐浴盤の銘、「苟日新，日々新，又日新」を大学から引用して Renew thyself completely each day, do it again, and again, and forever again. と書いているし、Solitude の章には論語の「徳不孤，必有隣」を Virtue does not remain as an abandoned orphan; it must of necessity have neighbours. また Higher Laws の章では曾子の「心不在焉，視而不見，聴而不聞，食而不知其味」を引用している。

かくソローが東洋の古い聖典や文学によく親しんで、それを自家薬籠中のものとして、東洋の聖哲の息吹をうけ、東洋の光をその核心にもっているのを見る時、我々東洋人は彼に非常な親しみを感じると共に深く敬意を表わさざるを得ないのである。

しかし彼は何も東洋の古い思想を祖述しただけではなかった。もとより彼独特のものをもっていたのであるが、ここでは唯彼と東洋思想との関係を簡略ながら論じた次第である。